事業名

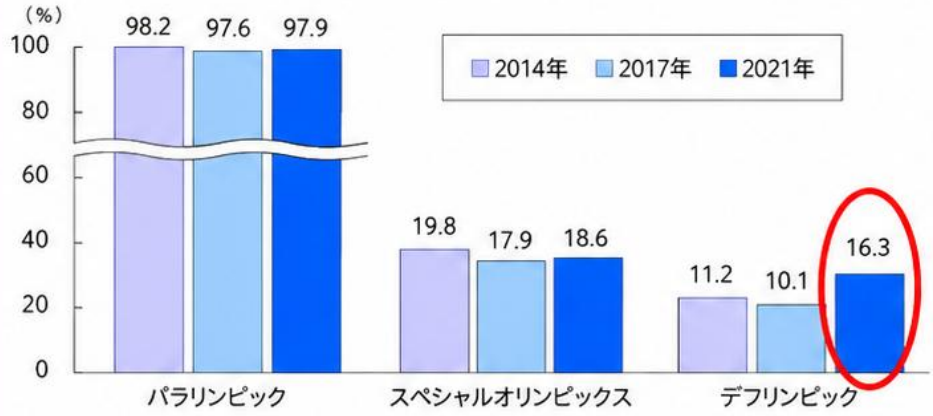
映像で観戦される方を意識した字幕・手話映像の制作と中継配信スタイルの確立事業ならびに、競技場へ来場される方を意識した場内ビジョン活用・映像の転用など場内演演出の確立事業

一般社団法人
日本デフ陸上競技協会

事業実施の背景・課題、目標

2025東京デフリンピック開催を意識した支援体制及び共生社会の実現

図表1　日本におけるパラリンピック・スペシャルオリンピックス・デフリンピックの認知度※の推移（2014・2017・2021年*2）



※1：認知度は、「パラリンピックという言葉を知っていますか」という質問に対して「内容を知っている」/「見たり聞いたりしたことがある程度」と答えた割合の合計。

※2：調査時期はそれぞれ2014年9～10月・2017年3月・2021年10月、回答者は20～69歳男女1,560人・1,560人・5,000人。

資料：日本財団パラスポーツサポートセンター　パラリンピック研究会・青山学院大学 小堀真研究室共同研究「東京2020パラリンピック競技大会後における国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心　第3回調査結果報告」2021年

2022年9月に国内初となる東京都で聴覚障がい者のオリンピックでもある「デフリンピック」が開催されることが決まりました。
ですが、2021年調べで全国調査では認知度がわずか「16%」と低く、注目度も低い状況でした。

【課題】認知度の低さ ＝ 支援の少なさ

競技力・運営力・組織力の脆弱

↓

認知度を上げる取組

① 競技普及の為の新たな「魅せる」スポーツの確立
② 積極的な普及活動の実施（デフ陸上教室）
③ デフアスリートが不自由なく競技会へ参加できる取組

↓

注目度・認知度・理解度 ＝ 支援の向上

・経営の安定化：補助金に頼らない運営
・人材の活用：適材適所の人材が確保できる
・新たな取組へのチャレンジ　etc...

↓

東京2025デフリンピックの成功

デフアスリートが輝けると共に健聴者との共生が実現

本事業における具体的な取組内容

計画№１　主催大会での新たな魅せる（見せる）観戦スタイル転換とファンエンゲージメントの確立

実施期間：令和5年度～令和7年度まで
取組内容：日本デフ陸上競技選手権大会において、「聞こえない・聞こえにくい人も楽しめる大会」を目指し、情報保障と観戦環境の充実に取り組んだ。リボンビジョンやモニターを活用した場内アナウンスの字幕表示、手話通訳映像の表示など、「音を可視化する」取組を実施した。また、映像やSNSを活用した広報にも力を入れ、令和6年度には協会・大会PR動画を制作。令和7年度には、デフ陸上の人気選手3名をモデルに、デフリンピックPR動画・ポスターを制作し、幅広い世代への認知度向上とファン層の拡大を図った。







計画№２　デフ陸上教室・スタートランプ体験の普及支援事業と聴覚障がい競技者サポート事業



実施期間：令和５年度～令和７年度
取組内容：全国の学校や啓発イベント等へデフアスリートを派遣し、陸上教室・体験会・デフリンピック啓発講演などを実施。企業・団体とも連携し、デフ陸上の普及と会員数の増加を目指した。また、日本陸連や全日本実業団等と連携し、健常者大会へのデフ選手の参加を促進。スタートランプの導入や運用研修を行い、デフ選手が参加しやすい競技環境の整備と、デフ陸上への理解促進を図った。さらに、関係団体・スポンサー企業等との定期的な協議・連携体制を構築した。

計画№３　組織運営をマネジメントする報酬制度による人材活用

実施期間：令和5年度～令和7年度まで
取組内容：専門知識を持つ人材を雇用し、協会運営、マネジメント、スポンサー獲得、対外調整等の業務を専任的に担当する体制を整備した。また、マネジメント、マネジメントサポート、事務局員の雇用を継続するとともに、業務のさらなる充実・効率化に向け、新たな人材の確保にも取り組んだ。





計画№４　円滑な運営体制を構築するためのネットワークシステム化

実施期間：令和5年度～令和7年度まで
取組内容：全国にいる理事・スタッフが円滑に連携できるよう、リモート会議やクラウド型ファイル共有システムを導入し、業務の効率化と情報共有を進めた。また、PCやWebカメラ等の機器を整備し、Zoom等のオンライン環境を活用した会議・打合せができるネットワーク体制を構築した。



一般社団法人
JDAA 日本デフ陸上競技協会
Japan Deaf Athletics Association

令和７年度の取組内容

計画№１　聴覚障がい者スポーツを“魅せる”映像配信・SNS広報戦略業務

○情報保障・観戦環境の充実
手話・字幕・映像を活用し、聞こえない・聞こえにくい人も楽しめる観戦環境を整備した。特に、手話を第一言語とする「手話実況」「手話解説」を実施し、当事者がスポーツの実況・解説を行う国内初の試みに取り組んだ。また、競技場内ビジョンやライブ配信を活用し、リアルタイムで競技情報を提供した。

➡ **１６３６０回再生**





○PR動画・ポスターによるファン層の拡大
令和7年度は、SNSのフォロワー数増加と新たなファン層の獲得を重点に取り組んだ。人気デフ選手をモデルに革新的なポスターを制作するとともに、PR動画を撮影・発信し、デフ陸上・デフリンピックの魅力を幅広く発信した。

➡ **６４０００回再生**



○SNSを活用した情報発信の強化
SNS発信に精通した専門人材を起用し、ショート動画の制作・投稿などSNS運用を強化した。継続的な情報発信により、SNSでの認知度を高め、デフ陸上・デフリンピックのファン層拡大を図った。

➡ **５３７８フォロワー**





令和７年度の取組の進捗･成果･課題

【令和7年度の進捗・成果】
SNSや動画等を活用した積極的な情報発信により、デフ陸上・デフリンピックへの注目度を高め、スポンサーを獲得することができた。また、PR活動を通じて、幅広い層への認知拡大とファン層の拡大につながった。

【令和7年度に生じた課題】
デフリンピック終了後は、大会開催時に高まった注目度や関心が低下することが想定されるため、継続的な情報発信とファン・スポンサーとの関係維持が課題となる。今後もSNSや動画を活用し、デフ陸上への関心を継続させる取組が必要である。





令和７年度の取組内容　進捗・成果・課題

計画№２　デフ陸上教室・スタートランプ体験の普及支援事業とデフアスリートサポート事業

○デフ陸上教室・体験会・イベント開催

全国の教育機関や啓発イベントにデフアスリートを派遣し、手話を活用した陸上教室・体験会・デフリンピック講演会等を実施した。

７７回実施

活動を重ねる中で全国各地からの開催依頼が増加し、幅広い年齢層との交流機会を創出することができた。また、東京2025デフリンピックを契機にデフスポーツへの関心が高まり、体験会等を通じてその魅力を直接伝えることで、健聴者を含めたデフ陸上競技の認知・理解の向上につながった。









○デフアスリートサポート・理解啓発研修会開催

・日本陸上競技連盟や実業団等と連携し、全国の大会におけるデフ選手の参加機会を拡大するとともに、スタートランプや手話通訳の活用を推進

・大会関係者や指導者を対象とした研修会を実施し、デフアスリートの受入れや必要な配慮について理解を深めた。

・令和5年度にはスポーツ庁の支援を受け、全国30か所以上にスタートランプを整備

・東京2025世界陸上においてデフアスリートがエキシビションレースに参加する機会を実現し、関係機関との連携を強化

・全国障害者スポーツ大会に初めて指導員を派遣し、デフアスリートへの配慮事項などの指導を実施

２０回実施

デフアスリートが安心して競技できる環境が広がり、大規模大会への参加機会の拡大や競技力向上、障がいの有無に関わらずスポーツを楽しむ共生社会の実現につながった。













計画№３　組織運営をマネジメントする報酬制度による人材活用

これまでの協会運営の経験を踏まえ、組織基盤の強化に向けて、専門知識を有する人材をボランティアから報酬制度による専任体制へ移行した。マネジメント職、マネジメントサポート、事務局員の雇用を継続し、マネジメント3名体制を維持することで、協会運営、スポンサー獲得、対外調整等の業務を安定的に推進した。また、新たな人材の確保にも取り組み、基礎基盤強化事業の運用を通じて、組織全体の運営力向上と持続可能な体制の構築を図った。

専門人材の専任配置と報酬制度の導入により、協会運営の安定化と業務効率化を実現。業務分担の明確化や意思決定の迅速化が進み、組織全体の運営力が向上した。事務局機能の強化により、持続可能な組織運営体制の整備につながった。

計画№４　円滑な運営体制を構築するためのネットワークシステム化

・リモート会議システムやクラウド型ファイル共有ツールを活用し、理事・スタッフ間の情報共有や資料管理を効率化するとともに、円滑な連携を図る体制を整備
・SNSの運用方針を策定し、ターゲットを明確にした計画的な投稿・広告配信を実施
・ドローン、360度カメラ、高性能カメラ等を活用した映像制作体制を整え、大会や普及イベントの魅力を伝える高品質なコンテンツを制作・発信

これらの取組を継続するとともに、発信効果を検証・改善しながら、デフ陸上競技の認知度向上と情報発信力の強化につなげた。

令和７年度の取組の進捗・成果・課題

【令和7年度の進捗・成果】

全国の教育機関や啓発イベント等で、デフ陸上教室・体験会・講演会77回、理解啓発研修会等20回、計97回を実施した。全国各地でデフアスリートとの交流機会を創出し、デフ陸上やデフリンピックの魅力を発信するとともに、スタートランプや手話通訳の活用を推進し、競技環境と参加機会を拡大した。
また、東京2025デフリンピックや世界陸上でのエキシビションレース等を通じて、競技関係者や一般のスポーツ関係者への理解を促進し、デフ陸上の認知・理解向上と共生社会の実現に向けた基盤づくりにつながった。

【令和7年度に生じた課題】

東京2025デフリンピック終了後、社会的な注目度や関心が低下することが懸念される。一過性の関心に終わらせず、継続的な教室・体験会や情報発信を通じて、デフ陸上への関心を維持・拡大していく必要がある。また、増加する開催依頼に対応するため、アスリート・指導者・運営スタッフの人材確保と全国的な実施体制の整備も課題となっている。

本事業の成果目標・KPIの達成状況

KPI 1　SNS等を駆使しデフ陸上の理解、普及、啓蒙などの宝庫活動を実施する

	令和4年度 （助成を受ける前）	令和5年度 （1年目）	令和6年度 （2年目）	令和7年度 （3年目）	助成を受ける前からの比
会員数	108人	131人（+21％）	166人（+27％）	183人（+10％）	**69％増**
サポート会員	4人	7人（+75％）	45人（+543％）	38人（-15％）	**950％増**
Instagram	1200人	2000人	2627人（+31％）	5378人（+104％）	**448％増**
Facebook	1200人	1700人	1758人（+3％）	3256人（+85％）	**271％増**

KPI 2　主催大会において、革新的な配信事業、来場者サービスを実施する

視聴回数	5,400回	8500回（+157％）	11780回（+39％）	16370回	**303％増**
来場者数	約1,000人	2000人（+100％）	2,430人（+22％）	2100人（-14％）	**210％増**

KPI 3　・デフ陸上の理解、普及、啓蒙などの広報活動と連動したデフ陸上教室・啓発イベント,を実施する
・陸上競技会などへのスタートランプ、聴覚障がい者競技者へのサポートを実施する

イベント・ 陸上教室開催	6回	27回（+450％）	67回（+148％）	77回（+15％）	**1283％増**
アスリート支援	6回	13回（+216％）	19回（+46％）	20回（+5％）	**333％増**







【大会２日目】第22回5月6日(火・祝) 日本デフ選手権大会

▷ 7227　1 年前 に配信済み



【大会1日目】第22回5月5日(月・祝) 日本デフ選手権大会

▷ 9143　1 年前 に配信済み

一般社団法人
JDAA 日本デフ陸上競技協会
Japan Deaf Athletics Association

本事業を通じて感じた成果・課題と今後の展開

2025東京デフリンピックに向け、「ファンの拡大」と「誰もが楽しめる情報保障」を重点的に推進

① 成果

- デフリンピックの認知度　上昇
- SNSフォロワー数：約4倍
- イベント・陸上教室：従来の10倍以上
- 「知る・見る・体験する」機会を拡大
- リボンビジョン・字幕・手話通訳を導入
- 「音の可視化」を東京2025にも展開

② 課題

- 地方の認知度向上の格差
- デフ陸上を継続的に応援するファンの定着
- 大会・イベントを支える人材の確保
- 情報保障を継続・標準化する仕組みづくり
- 会場だけでなく配信でも情報格差を解消

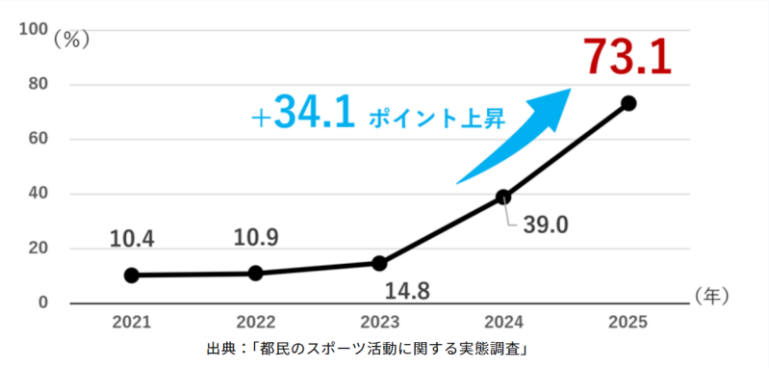
③ 今後の展開

- 地方の認知度向上に向けた取組を継続
- SNS・学校・地域イベントを継続
- 情報保障のノウハウ・機材を標準化
- ボランティア等の人材を育成
- 企業・自治体・学校との連携を拡大
- 協賛・寄附・会員等による自主財源を強化

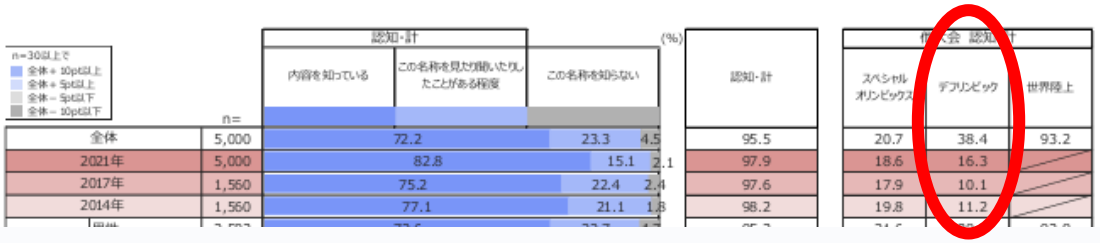
2025年のレガシーを「一過性の成果」にせず、持続可能なデフ陸上の発展へ

ファン拡大 × 情報保障 × 普及・育成 × 連携 × 自主財源 ＝ 持続可能な組織基盤

・東京都の調査　**73．1%に上昇**



出典：「都民のスポーツ活動に関する実態調査」



・日本財団調べ　2025年5月　**38.4%**

一般社団法人
JDAA 日本デフ陸上競技協会
Japan Deaf Athletics Association

令和8年度以降の構想（将来ビジョン）

誰もが一緒に楽しめるデフ陸上を実現し、持続可能な組織基盤を構築する

基本方針

1. ファン層の拡大
- SNSやイベントを継続強化
- 「日常的に応援するファン」の定着を目指す

2. 情報保障の充実
- 「音の可視化」を標準化
- 会場・ライブ配信の両面で情報保障を継続・発展

3. 普及・育成の強化
- 陸上教室・学校連携を拡大
- 子どもたちの体験機会を増やし、競技人口を拡大

4. 連携・協働の拡大
- 企業・自治体・学校等と連携
- 共生社会の実現に向けて取組を広げる

5. 自主財源の確保
- スポンサー・寄附・会員等の多様な財源を確保
- 事業の安定継続を実現

持続可能な発展のための循環モデル

持続可能な組織基盤の強化
【競技力強化・ファン拡大・情報保障普及育成・自主財源の好循環】

① 認知・関心の拡大
SNS・広報活動・メディア露出
イベント・陸上教室の実施

② ファン・参加者の獲得
フォロワー・参加者の増加
体験を通じたファンの定着

③ 大会・イベント・陸上教室の継続実施
主催大会・合同練習・普及活動の拡大

④ 情報保障の充実による「誰もが楽しめる大会」の実現
リボンビジョン・字幕・手話通訳
ライブ配信・多言語対応など

⑤ 連携・協力の拡大
企業・自治体・学校・地域団体等との連携強化

⑥ スポンサー・自主財源の拡大
企業協賛・寄附・会員・イベント収入等多様な財源を確保

SNS・広報の強化

- フォロワー数の継続増加
- 選手の日常や大会情報を継続発信

体験機会の創出

- 陸上教室・学校訪問
- スタートランプ体験
- デフ陸上を「知る・見る・体験する」機会を拡大

大会での情報保障の実践

- リボンビジョン・字幕表示
- 手話通訳モニターの設置
- 「音の可視化」を標準化

連携・協働の拡大

- 企業・自治体・学校等と連携
- 共生社会に向けた取組を推進

自主財源の確保

- 企業協賛・寄附の拡大
- 会員・ファン層の拡大
- 社会的意義を発信し、持続可能な財源を確保

ライブ配信の充実

- 字幕・手話通訳・手話実況解説
- 世界中のろう者・難聴者に競技の魅力を発信

組織基盤強化の取組

人材の育成・確保
- ボランティア・学生・競技関係者の育成
- 情報保障、運営ノウハウの継承

機材・システムの整備
- 機材の共通化・整備
- 運営マニュアルの作成
- 効率的な運営体制の構築

データに基づく改善
- データの収集・分析
- 取組の効果 検証
- 改善の継続（PDCA）

安全・安心な大会運営
- 安全管理・暑熱対策の強化
- アスリート・観客の安心を確保

共生社会の実現
- 聞こえる人も一緒に楽しめる
- 多様性を尊重する社会の実現に貢献

2025年デフリンピックのレガシーを、未来のデフ陸上競技の発展と共生社会の実現へつなげていきます。